東宮御所　本館の建設

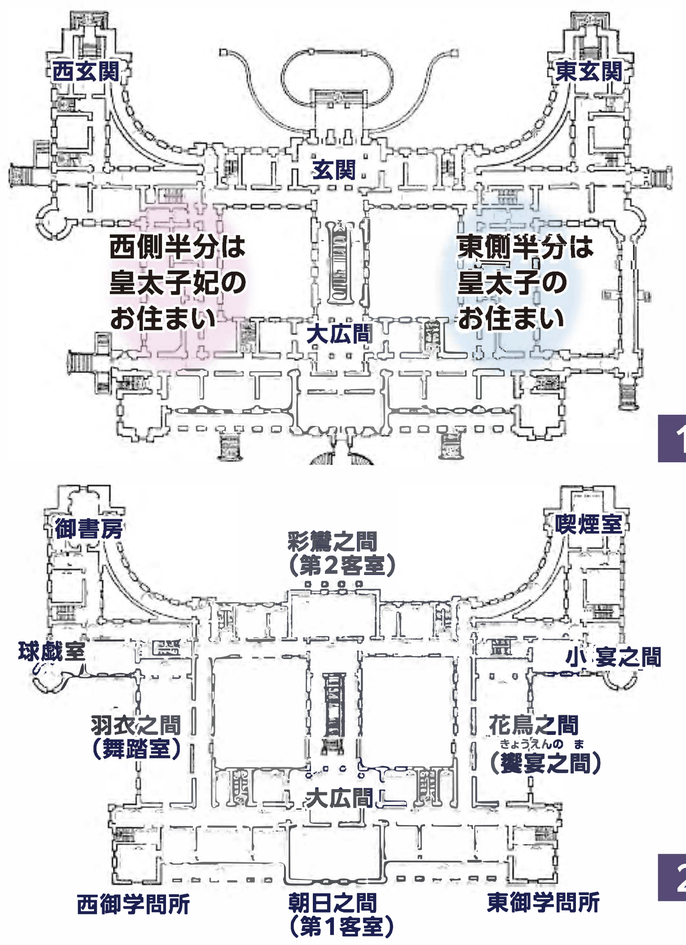
迎賓館赤坂離宮の本館は、1909（明治42）年、当時の皇太子（後の大正天皇）のお住まいである東宮御所として建てられました。建築家の片山東熊（かたやまとうくま）が総指揮に当たり、各分野のトップクラスの技術者や職人が参集し、約10年の歳月をかけ、当時の金額で約510万円（現在の価値で1,000億円程度と言われています。）の費用をかけて完成しています。

本館は地上2階、地下1階からなり、1階は東側半分が皇太子、西側半分が皇太子妃の御住まい、2階には接客用の御部屋のほか、書房、球戯室、食堂、喫煙室などを配置、地下1階には厨房、設備室などが配置されていました。

片山　東熊（かたやまとうくま）　(1854-1917)

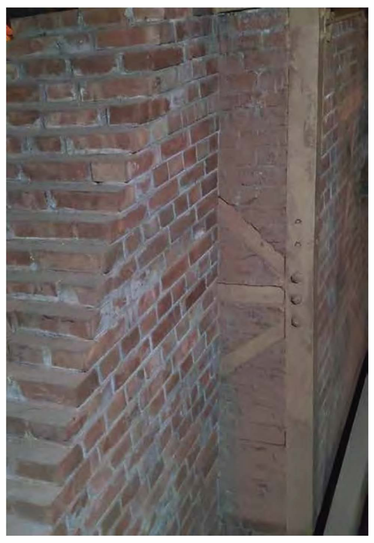
工部大学校造家学科（現在の東京大学工学部建築学科）の第1期生。
代表作として、当館のほか、東京国立博物館の表慶館、京都国立博物館、奈良国立博物館などがあります。
東宮御所の建設に当たり、室内装飾の調査や鉄骨の発注のため、ヨーロッパやアメリカを度々訪れています。

創建当時の平面図

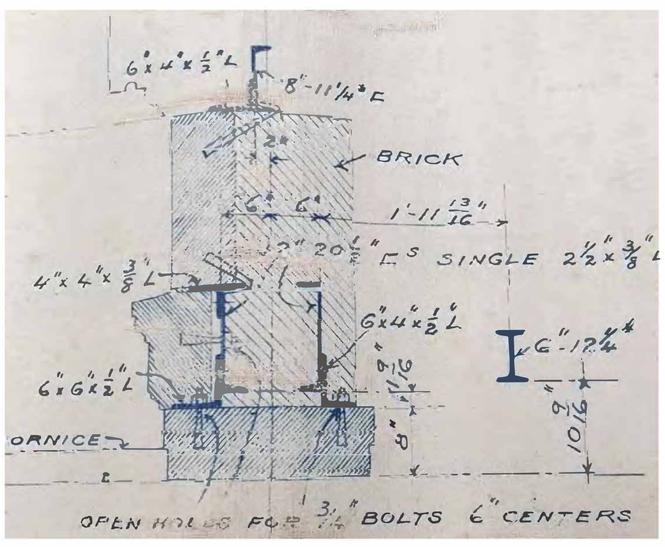


災害対策

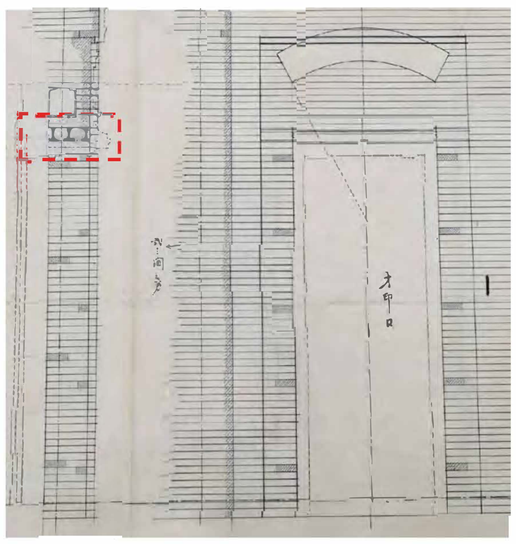
本館は、様々な災害対策が施されており、なかでも地震対策には特に配慮がされています。建設予定地の20か所で地盤調査を行い、建物位置、支持地盤が決定されており、基礎部分は補強のために鉄道レールが用いられた分厚いコンクリートの上にレンガが積み上げられています。地上部分は、外部は花崗岩（かこうがん）、内部はレンガによる組積構造で、要所に鉄骨で補強された構造となっています。



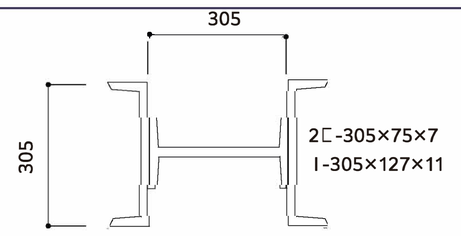
建物内部のレンガ積み



創建時の図面から外壁の石1個につき少なくとも3個の「ダボ」又は「かすがい」により緊合されていることが確認できます。（宮内庁宮内公文書館蔵）

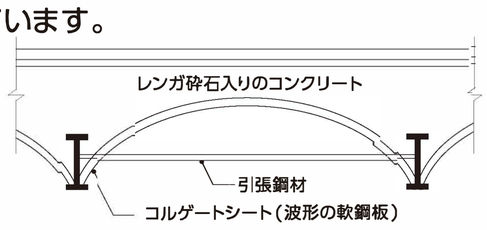


2階バルコニーへの出入口の創建時図面。扉上部に補強のために3本の鉄道レールが使用されていることが確認できます。（宮内庁宮内公文書館蔵）



主要な柱断面図

2本の[型鋼と1本のI型鋼を組合せた鉄骨柱が、各階400本以上配置されています。



主要な床版断面図

床は波形の軟鋼板をアーチ状にわん曲させ、その上にレンガ砕石入りのコンクリートを打設した耐火構造となっています。

鉄骨は、アメリカ合衆国ピッツバーグの「カーネギー製鉄所」にて製造されました。当時の日本には本格的な鉄骨造建設の経験がある技術者が見当たらなかったため、組み立てに当たっては、カーネギー製鉄所の技術者に指導を受けながら行いました。

鉄骨の総量は、約3,000tにも及び、建物の面積の約3割を壁や柱が占め、壁の最も厚いところは約1.8m、薄いところでも約56cm、使用されたレンガは約1,300万個にも及びます。

このように地震対策に重きを置かれた本館は、1923（大正12）年の関東大震災でも、大きな損傷はありませんでした。

本館で使われている「CARNEGIE」（カーネギー）の刻印が入った鉄骨

東宮御所　本館の建設

和の意匠を取り入れた西洋風宮殿建築

本館は「ネオ・バロック様式の西洋風宮殿建築」です。「ネオ・バロック様式」とは、16世紀中頃から18世紀初頭までヨーロッパ中を風靡（ふうび）した美術様式「バロック様式」の復興であり、左右対称の外観、豪華絢爛（ごうかけんらん）な装飾が特徴で、パリ・オペラ座が代表的な建物です。

建築の総指揮に当たった片山東熊（かたやまとうくま）は、ヨーロッパの建築様式を採用しながらも、「和の意匠」にこだわり、様々なところに日本的な要素を取り入れており、現在もその姿を見ることができます。

パリ・オペラ座（ガルニエ宮）

屋根の甲冑

本館屋根の左右に一対ずつ、青銅製の鎧兜（よろいかぶと）に鉄面をつけた甲冑（かっちゅう）の武士像がこの“宮殿”を守るように置かれています。東側の一体は口を開け、西側の一体は口を一文字に結び、「阿吽（あうん）の仁王（におう）」のようです。

菊の御紋章、五七の桐の紋章など

天皇、皇室の象徴の「菊の御紋章」や現在日本国政府の紋章として用いられている「五七の桐の紋章」、日本の勲章である「旭日章（きょくじつしょう）」、「瑞宝章（ずいほうしょう）」の浮き彫り装飾が様々な箇所で見られます。

正面玄関の扉の上部には菊の御紋章、中段には五七の桐の紋章の装飾

南北外壁面上部の三角形の壁（ペジメント）には菊の御紋章、その下には旭日章、瑞宝章の浮き彫り装飾

屋根の天球儀と霊鳥の傍には五七の桐の紋章

２階大ホール正面階段上部の壁に菊の御紋章

日本の武具のレリーフ

鎧（よろい）、兜（かぶと）、剣（つるぎ）など、日本の武具の浮き彫り装飾が様々な箇所で見られます。

〈朝日の間〉陸軍を象徴した鎧に獅子の壁画

彩鸞（さいらん）の間のマントルピースには日本の刀と西洋のサーベル

〈彩鸞の間〉鎧、兜文様の金箔貼りの石膏浮き彫り装飾

南北外壁面上部の三角形の壁（ペジメント）には鎧、兜の浮き彫り装飾

日本の楽器の浮き彫り装飾

羽衣の間では、西洋風の仮面やバイオリンなどの洋楽器と共に「琵琶（びわ）」や「鼓（つつみ）」といった和楽器のモチーフが組み合わされています。

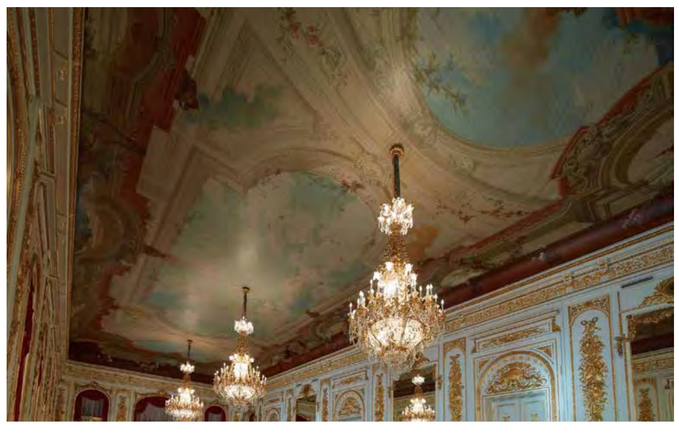
「琵琶」のモチーフ

「鼓」のモチーフ

花鳥の間の七宝焼

花鳥の間には、明治大正期を代表する日本画家渡辺省亭（わたなべせいてい）が描いた下絵を七宝（しっぽう）作家の濤川惣助（なみかわそうすけ）が焼成した30枚の七宝が飾られています。

羽衣の間の天井画



羽衣の間の天井画は、日本の謡曲「羽衣」の「虚空（こくう）に花ふり音楽聞え霊香（れいきょう）四方（よも）に薫（くん）ず」という一節が描かれています。

室内装飾における洋と和の融合 ― 日本を代表する美術家の関わり

西洋風宮殿建築の東宮御所には、フランスを中心に海外から輸入した家具調度品が用いられましたが、室内装飾の七宝や美術織物、そして〈喫煙之間〉の壁画を洋画家・和田英作が手掛けるなど、当時の日本を代表する美術家が関与しています。これらの制作に携わった美術家の多くは、帝室技芸員や工部美術学校（日本最初の美術教育機関で、東京大学工学部の前身の一つである工部大学校の付属機関として設置、1883年に廃校）、東京美術学校（現・東京藝術大学）の関係者でした。七宝額、綴織壁掛、刺繍絵画等の装飾は、西洋装飾様式の室内に見事に調和し、華やかな空間を演出しました。

七宝額

七宝は金属の素地にガラス質の釉薬を焼成した工芸技法及び作品で、世界各国で製造されています。明治期に入り、濤川惣助や並河靖之などの名工による工芸品が欧米諸国に数多く輸出され人気を博しました。

《尉鶲に牡丹》七宝　《駒鳥に藤》七宝　《黒鶫に木瓜・山桜》七宝

〈花鳥之間（饗宴之間）〉〈小宴之間〉の七宝額

渡辺省亭が原画を描き、濤川惣助が七宝を制作した七宝額が〈花鳥之間〉に30面、〈小宴之間〉に2面、計32面が壁面を飾っています。無線七宝の技法による絵画的表現は、七宝の最高傑作と称されています。

渡辺省亭 (1852–1918)

明治から大正期にかけて活躍した日本画家。1875（明治9）年、起立工商会社に就職し、七宝図案等を描きました。1878(明治11)年、日本画家として初めてフランスに留学し、ドガ等と交流を深めました。西洋画の表現を取り入れた花鳥画を得意とし、濤川惣助の七宝工芸図案を数多く描いています。

濤川惣助 (1847–1910)

明治期の七宝家。無線七宝により、絵画的な表現技法を確立しました。国内外の博覧会で数々の賞を受賞し、1896（明治29）年、帝室技芸員に任命されました。

綴織壁掛

綴織は模様織物の一種で「綴錦」とも称し、日本の美術織物の最高峰と言われる織物です。フランスのゴブラン織やエジプトのコプト織などと同種のもので、欧米ではタペストリー（tapestry）と呼称されています。

《武士山狩図》綴織

〈狩之間〉の綴織壁掛

鷹狩りを主題とした原画を洋画家・浅井忠が描き、2代目川島甚兵衛（川島織物）が制作しました。

綴織は緻密で高い技術を必要とする染織品であり、縦293cm×横381cmの大画面の制作には多くの時間を要しました。綴織が完織したのは1913（大正2）年で、完成するまでの間は、浅井忠が描いた原画の油彩画が飾られました。

浅井忠 (1856–1907)

明治期に活躍した洋画家。1876（明治9）年に工部美術学校に入学、フォンタネージに師事しました。1931（昭和6）年東京美術学校教授に就任、1933（昭和8）年にフランスに留学し、帰国後、京都高等工芸学校教授に就任しました。渡欧後は印象派の画風を取り入れた作品を制作し、水彩画も数多くの佳作を残しました。

刺繍絵画

刺繍絵画は日本を代表する美術工芸品として、明治期を中心に盛んに制作されました。日本刺繍の最高峰とも評され、極めて細密で高度な技巧の限りが尽くされています。当時の万国博覧会にも出品され、輸出品として制作されたことから、作品の多くは海外に存在し、国内に現存する作品は少ないと言われています。

《孔雀花卉の図》刺繍

〈孔雀之間〉の刺繍絵画

東宮御所創設時に制作された《孔雀花卉の図》は、花鳥画を得意とする今尾景年が原画を描き、4代目飯田新七（高島屋）が制作しました。画面中央に桜の木に乗る二羽の孔雀、そして桜の木の下には牡丹が描かれています。本作品は国内に現存する刺繍絵画の貴重な一つと言えます。

今尾景年 (1845–1924)

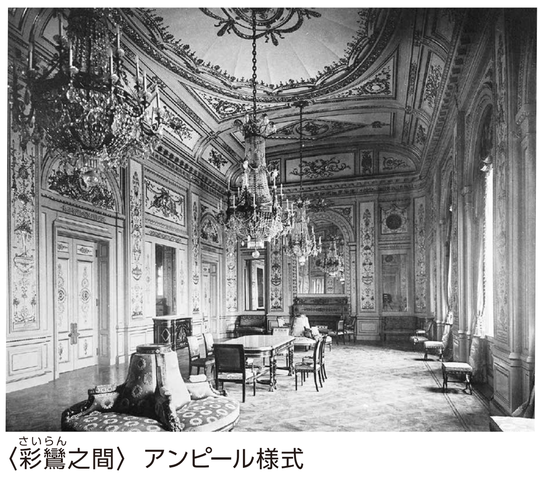
明治、大正期に活躍した日本画家。色彩豊かな花鳥画を得意とし、1926（大正15）年シカゴ万博で名誉賞、1933（昭和8）年パリ万博で銀賞を受賞し、海外でも高い評価を得ました。1937（昭和12）年に帝室技芸員、1919（大正8）年に帝国美術院会員に任命されました。

東宮御所の室内装飾 ①

バロック様式の復興であるネオ・バロック様式の絢爛豪華な宮殿建築の内部は、「ルイ16世様式」、「アンピール様式」、「アンリ２世様式」、「ムーリッシュ様式」といった各装飾様式に合わせた家具、シャンデリア、浮き彫り装飾、タペストリー、油彩画の天井画等で彩られています。なかでも各部屋でモチーフが異なる天井画は、国内最大規模の面積を誇ります。

東宮御所の最も大きな特徴は、西洋建築の基本様式の中に日本特有の美を融合させ、全体として調和のとれた重厚な独自の世界を表現していることと言えます。天井画や家具調度品は主に欧州の室内装飾会社から納入されていますが、古代ギリシャ、ローマ等の代表的な建築装飾に、甲冑武具、和楽器、桜等の日本的要素が巧みに組み合わされています。また、七宝や綴織壁掛、刺繍絵画等の海外からも高い評価を得ていた日本の美術工芸の優美な和の世界が室内に溶け込んでいます。細部にまで手の込んだ装飾の数々は、当時の美術工芸の粋を結集した造りとなっています。

〈朝日之間〉 ルイ16世様式


〈彩鸞之間〉 アンピール様式

〈花鳥之間（饗宴之間）〉アンリ２世様式

〈羽衣之間（舞踏室）〉ルイ16世様式

『東宮御所御写真帖』 宮内庁宮内公文書館蔵

天井画

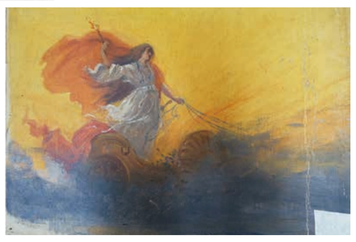
天井画はフランスで制作されたカンバスに描いた油彩画で、フランスの室内装飾会社のL.アラヴォアンヌ社（L. Alavoine社）から購入しています。天井画は船で輸送され、屏風や襖などを表装する職人である、日本の経師の技術により天井に張り付けられました。

朝日の間

〈朝日の間〉天井画

数種類の下絵から、天井画の題材が決定された経緯を辿ることができます。第一客室である朝日の間の天井画は、「国運隆昌の意を表彰し」をテーマに描かれ、朝日を背に、クアドリガと呼ばれる４頭立ての戦車（チャリオット）に乗る姿は曙の女神オーロラをイメージさせるものですが、女神を東洋的人物に描き、周囲には桜を描くなど、日本の要素を取り入れ表現しています。

天井画のモチーフに似た建物外構部の彫刻装飾下絵
（『東宮御所御造営洋館図25』 宮内庁宮内公文書館蔵）



天井画下絵 （『東宮御所御造営洋館図40』 宮内庁宮内公文書館蔵）

羽衣の間

天井画は謡曲「羽衣」の一節「虚空に花降り音楽聞こえ霊香四方に薫ず」の場面を画題としており、香炉から立ち昇る煙や風にたなびく衣等、西洋的モチーフを用いて幻想的な情景を表現しています。また、空を見上げる構図を用いて、建物を遠近法の手法で描くことで、奥行きや高さを感じさせる空間表現がなされています。面積は約290㎡で、館内で最も大画面の天井画です。

〈羽衣の間〉天井画

天井画下絵（『東宮御所御造営洋館図40』宮内庁宮内公文書館蔵）

花鳥の間

賓客をおもてなしする場である室内の格子天井には、狩猟に関連する鳥獣や植物等を描いた油彩画24枚、金地背景の装飾画12枚が張り込まれています。

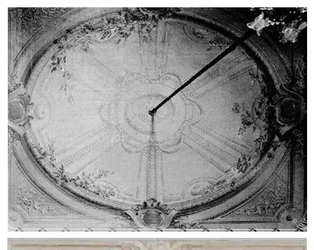
〈花鳥の間〉天井画の一部

天井画下絵：左から２番目の下絵には完成図にはない「鶴」が描かれています。（『東宮御所御造営洋館図40』宮内庁宮内公文書館蔵）

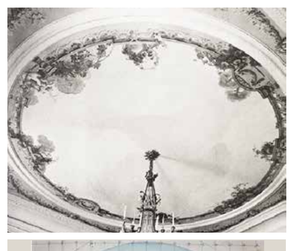
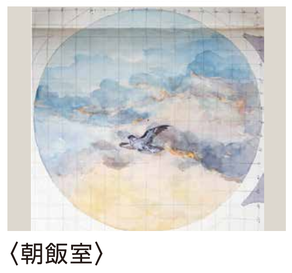
その他の天井画

東宮御所造営に関する資料として、天井画の購入記録とともに、下絵の一部が残されています。完成図とは異なる下絵もあり、日本と制作側であるフランスとの両者で意見を交わし、各室の使用目的や室内の装飾様式に合わせた図案を、最終的に決定したと思われます。

〈狩之間〉



〈東御学問所〉



〈朝飯室〉

上段：天井画写真（『東宮御所写真帖』 宮内庁宮内公文書館蔵） 下段：天井画下絵（『東宮御所御造営洋館図40』 宮内庁宮内公文書館蔵）

東宮御所の室内装飾 ②

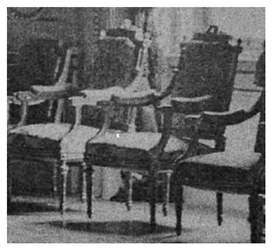
家具調度品

家具調度品は欧州からの輸入が中心であり、フランスのフルディノワ（H. Fourdinois）、エンシェル（G. Hoentschel）、ドイツのモスレ（A. G. Mosle）からの納入記録があります。なかでも欧州各地の王室等に納入実績を持つフルディノワ（H. Fourdinois）から、L.アラヴォアンヌ社（L. Alavoine社）を通して多くの家具調度品を購入しています。

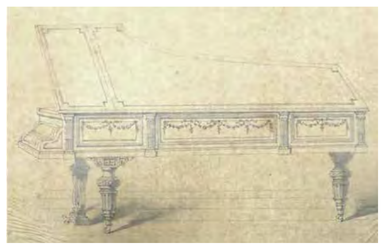
東宮御所造営に関する資料には、家具のデザイン画やカタログ、そして配置図が残されています。カタログ等を参考に各部屋の装飾様式に合わせた意匠の家具と配置を決定したと思われ、菊花の御紋章などの装飾を加えた家具が納入されています。

なかでも〈花鳥之間（饗宴之間）〉の木製彫刻の大食器棚は大変重厚な造りであり、『東宮御所御造営誌』には「仏国名工の製作にして最もその傑作なりといふ。」と記されています。また、〈羽衣之間（舞踏室）〉のグランドピアノは、フランスのエラール社製のピアノ（エクストラコンサートグランド）に装飾画を施した特注品です。

〈花鳥之間（饗宴之間）〉大食器棚
左：図案（『東宮御所御造営洋館図35』　宮内庁宮内公文書館蔵）
右：写真（『東宮御所写真帖』　宮内庁宮内公文書館蔵）



〈羽衣之間（舞踏室）〉椅子
左：図案（『東宮御所御造営洋館図31』　宮内庁宮内公文書館蔵）
右：写真（『東宮御所写真帖』　宮内庁宮内公文書館蔵）



〈羽衣之間（舞踏室）〉グランドピアノ
左：図案（『東宮御所御造営洋館図31』　宮内庁宮内公文書館蔵）
右：写真（『東宮御所写真帖』　宮内庁宮内公文書館蔵）

家具購入書類
（『臨時費東宮御所建築費35 明治39年』
宮内庁宮内公文書館蔵）

照明

シャンデリアはフランスの高級照明会社のガニョー社（GAGNEAU & CIE）等、欧州から納入されました。見本のカタログを基に、菊の御紋章や各部屋の装飾様式に合わせた装飾を新たに加えた意匠で製作されています。

ガニョー社のメーカーマーク
（『東宮御所御造営洋館図面42』　宮内庁宮内公文書館蔵）

〈花鳥之間（饗宴之間）〉シャンデリア
左：図案（『東宮御所御造営洋館図面42』　宮内庁宮内公文書館蔵）
右：写真（『東宮御所写真帖』　宮内庁宮内公文書館蔵）

〈羽衣之間（舞踏室）〉シャンデリア
左：図案（『東宮御所御造営洋館図面42』　宮内庁宮内公文書館蔵）
右：写真（『東宮御所写真帖』　宮内庁宮内公文書館蔵）

窓掛・裂地

窓の装飾である窓掛（カーテン）は、各部屋の装飾様式に揃えた意匠です。室内装飾の多くは輸入品でしたが、窓掛に使用された裂地は、飯田新七、西村総左衛門、川島甚兵衛、曽和嘉一郎が手掛けたものであり、海外からも高い評価を得ていた日本の染織技術により製作されました。

〈彩鸞之間〉窓掛
左：図案（『東宮御所御造営洋館図36』　宮内庁宮内公文書館蔵）
右：写真（『東宮御所写真帖』　宮内庁宮内公文書館蔵）

〈羽衣之間（舞踏室）〉オーケストラボックス
左：図案（『東宮御所御造営洋館図35』　宮内庁宮内公文書館蔵）
右：写真（『東宮御所写真帖』　宮内庁宮内公文書館蔵）

タペストリー（壁掛）

〈花鳥之間（饗宴之間）〉には、狩猟と果実禽鳥を題材にした、ゴブラン織*のタペストリー（総面積約100㎡）が、大食器棚の周壁と壁面上部（欄間部分）に張り込まれました。

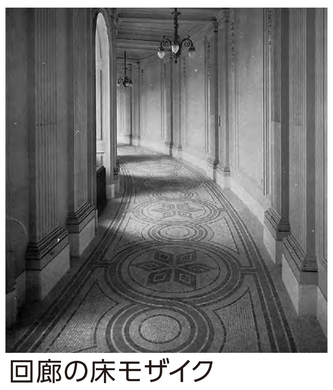
*ゴブラン織：フランスのゴブラン工場で製作されたタペストリーのこと。平織の一種で、日本の「綴織」の染織技法に相当するものです。

上段：写真（『東宮御所写真帖』　宮内庁宮内公文書館蔵）
下段：図案（『東宮御所御造営洋館図面35』　宮内庁宮内公文書館蔵）

床モザイク

中央玄関小ホールより東西玄関に至る回廊の床モザイクは、パリ・オペラ座の床モザイクを手掛けた、イタリア出身のモザイク職人、ジャンドメニコ・ファッキーナ（G.Facchina）の工房より納入されました。様々な種類と色彩の大理石を用いて製作され、美しい幾何学模様の床モザイクが張りつめられました。

床モザイク購入書類
（『臨時費東宮御所建築費31明治39年』
宮内庁宮内公文書館蔵）



回廊の床モザイク
（『東宮御所写真帖』　宮内庁宮内公文書館蔵）

パリ・オペラ座の床モザイク

浮き彫り装飾

室内の天井や壁には金箔を施した石膏浮き彫り装飾が華やかさを演出しています。〈彩鸞之間〉の甲冑武具をモチーフとした彫刻の他、〈羽衣之間（舞踏室）〉のトロフィーと呼ばれる浮き彫り装飾には、和楽器等の和の要素が西洋モチーフの中に巧みに取り入れられています。

〈彩鸞之間〉甲冑の浮き彫り装飾
2枚の図案から、ライオンの向きが変更されたことがわかります。
左：図案（上段：『東宮御所御造営洋館図面36』下段『東宮御所御造営洋館図面1』、
宮内庁宮内公文書館蔵）
右：写真（『東宮御所写真帖』　宮内庁宮内公文書館蔵）

〈羽衣之間（舞踏室）〉
浮き彫り装飾完成品には図案に描かれていない和のモチーフが加えられています。
左：図案（『東宮御所御造営洋館図面35』
宮内庁宮内公文書館蔵）
右：写真（『東宮御所写真帖』　宮内庁宮内公文書館蔵）

暖　炉

1階に21か所、2階に17か所設置された大理石の暖炉は各室で意匠が異なるもので、フランスの「LOICHEMOLLE」から納入されました。購入時に参考にしたと思われる、メーカーマークが入ったカタログが残されています。

LOICHEMOLLEのメーカーマーク
（『東宮御所造営図面外設ノ部3』　宮内庁宮内公文書館蔵）

〈朝日之間〉図案
（『東宮御所御造営洋館図面7』　宮内庁宮内公文書館蔵）

暖炉のカタログ
（『東宮御所造営図面外設ノ部2第2』　宮内庁宮内公文書館蔵）

改修設計者・村野藤吾

1967（昭和42）年に赤坂離宮を国の迎賓施設として使用することが閣議決定され、村野藤吾が改修設計を行いました。西洋風宮殿建築を国の迎賓施設に改修するに当たり、賓客をもてなす場にふさわしく、くつろぎのある空間とするため、平面計画、外構、室内装飾、家具、照明器具に至るまで微細な補正を行い、一部に全面的な改変を行いました。

村野藤吾（1891－1984）略歴

1891	（明治24）		佐賀県唐津生まれ
1918	（大正7）	27歳	早稲田大学建築学科卒業 渡辺節建築事務所入所
1929	（昭和4）	38歳	村野建築事務所開設
1935	（昭和10）	44歳	ドイツ政府から赤十字名誉賞受賞
1949	（昭和24）	58歳	村野・森建築事務所に改称
1953	（昭和28）	62歳	日本建築学会作品賞受賞（丸栄百貨店）
1955	（昭和30）	64歳	日本芸術院会員
1958	（昭和33）	67歳	藍綬褒章受章
1964	（昭和39）	73歳	日本建築学会作品賞受賞（日生劇場）
1967	（昭和42）	77歳	文化勲章受章
1970	（昭和45）	79歳	アメリカ建築家協会（AIA）名誉会員
1972	（昭和47）	81歳	日本建築学会建築大賞受賞
1974	（昭和49）	83歳	迎賓館改修の功績に対し皇室より御紋章入り銀盃壱組下賜 総理大臣・建設大臣より感謝状を受ける
1984	（昭和59）	93歳	第25回BCS賞受賞（新高輪プリンスホテル）※「BCS」の呼称は建築業協会（Building Contractors Society）に由来 11月26日死去

村野藤吾の主な建築作品・改修作品

1928	（昭和3）	37歳	日本基督教団南大阪教会塔屋
1933	（昭和8）	42歳	キャバレー・アカダマ（現存せず）
1936	（昭和11）	45歳	大丸神戸店（現存せず）
1937	（昭和12）	46歳	渡辺翁記念館　＊2005年 重要文化財（建造物）に指定
1953	（昭和28）	62歳	丸栄百貨店増築（現存せず）
1954	（昭和29）	63歳	世界平和記念聖堂 ＊2006年 重要文化財（建造物）に指定
1955	（昭和30）	64歳	八幡市立図書館（現存せず）
1957	（昭和32）	66歳	読売会館・そごう東京店
1959	（昭和34）	68歳	都ホテル佳水園
1960	（昭和35）	69歳	輸出繊維会館
1963	（昭和38）	72歳	日本生命日比谷ビル（日生劇場）
1965	（昭和40）	74歳	カトリック宝塚教会
1969	（昭和44）	78歳	西宮トラピスチヌ修道院
1974	（昭和49）	83歳	迎賓館赤坂離宮（旧東宮御所の改修）
1975	（昭和50）	84際	日本興業銀行本店
1980	（昭和55）	89歳	心斎橋ビル改修（現存せず）
1982	（昭和57）	91歳	新高輪プリンスホテル

〈朝日の間〉の手織り緞通製作の視察
1973（昭和48）年2月29日

迎賓館赤坂離宮落成式　1974（昭和49）年4月23日
改修事業に対して、総理大臣、建設大臣より感謝状が贈られました。

昭和の改修 ── 赤坂迎賓館へ

昭和30年代になり、国際関係が緊密化し外国からのお客様が多くなってきましたが、当時、日本には国の迎賓施設がなかったため、東宮御所として建てられた旧赤坂離宮を改修して迎賓館とすることになりました。

文化勲章受章者で建築家の村野藤吾（むらのとうご）の設計により、1968（昭和43）年から5年有余の歳月をかけ、外国からのお客様を迎えるにふさわしい迎賓館への改修が行われました。

なお、その後現在に至るまで、昭和の改修時の設計思想に基づいて、必要な改修を行っています。

正門・鉄柵　【黒と金】から【白と金】へ

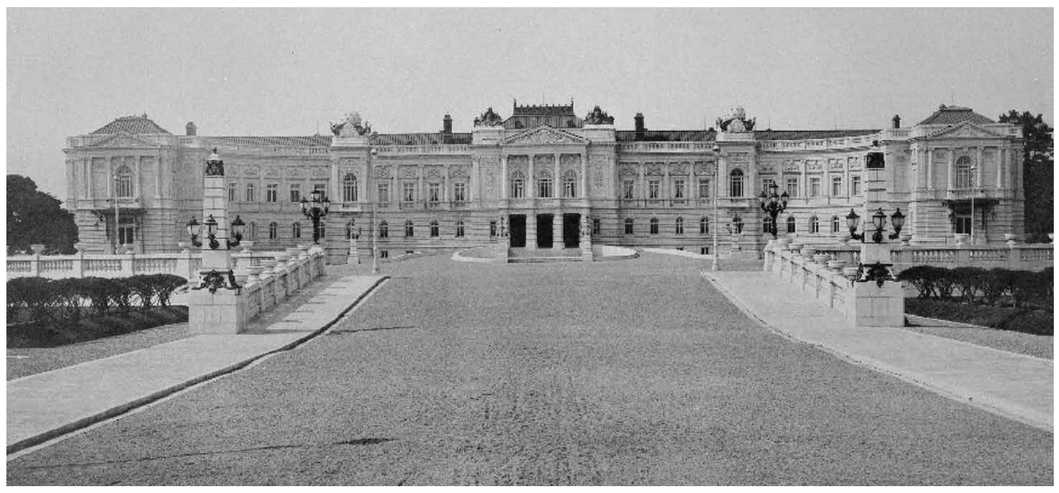
創建時は黒色であった正門・鉄柵を白色に塗り替えました。白色とすることで、植栽の緑も建物も柔らかく落ち着きを見せ、また一般の人々に近づきやすさを感じてもらうことを村野藤吾は期待しました。創建から50年以上が経ち、鉄部の腐食が激しかったため、全体的に補修を行い、特に傷みの激しい部分は新規材で製作、復元を行っています。

創建時の写真　正門上部の王冠は改修時には外されていました

昭和の改修後

門庭（正門から中門まで）・玄関庭（中門から本館玄関まで）の改修

改修前は幅が広く、途中から急な勾配がついていた正門から本館までの通路の幅を狭くし、迎賓館への親しみを感じてもらうため正門からの緩やかな勾配に改修しました。通路の両側には黒松を植え、正門側から木を通して本館を見ることで、日本的風格を印象付けるとともに、建物がやわらかく感じられることを村野藤吾は目指しました。通路部分と玄関庭には、ヴェルサイユ宮殿に倣い、大型のピンコロ石を敷き詰め、門庭と玄関庭との境には、潜戸（くぐりど）を思わせるヴェルサイユ宮殿のグラン・トリアノンの門をヒントにした中門を新設しています。また、樹木や花壇は本館の「ネオ・バロック様式」に倣い、左右対称に配置しています。



改修前は門庭と玄関庭の地盤面は２ｍもの高低差がありました

門庭の通路から黒松を通して眺める本館

昭和の改修後

昭和の改修で新設された門庭と玄関庭を区切る中門

村野藤吾による昭和の大改修
親しみのあるイメージへ

迎賓館に改修する設計を行った村野藤吾は当初の姿を尊重した上で、国の迎賓施設としてふさわしい「一般に親しみにあるイメージ」を基軸に改修設計を行いました。改修工事記録には、村野が語った「古い洋式と新しい洋式の調和」を目指した改修構想が記されています。

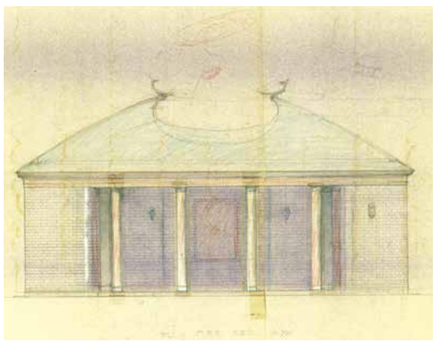
正門・鉄柵

『もし赤坂離宮が迎賓館にイメージチェンジする最大のかつ最も困難な仕事は、鉄柵の黒と金を白と金に変えることであると思った。』

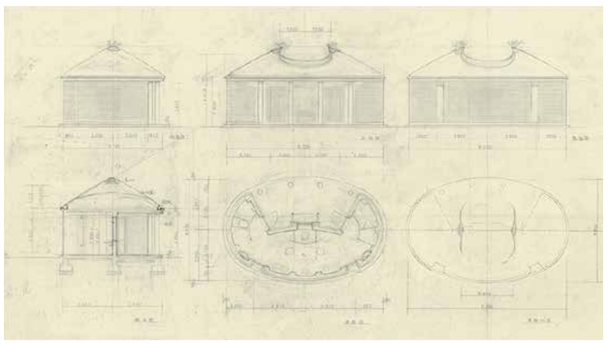
鉄柵の色について、『鉄柵を建物の灰白色や、古くからの人造石やコンクリートに調和させて沈んだ白い色にしたことで、白いベールに包まれて、松の緑も建物も柔らかく落ち着きを見せるようになった。』と語っており、周囲との調和に配慮したことがわかります。

門衛所

『屋根はバロック風にして、その上に金色の鳥の飾りをつけ子供にでも親しまれるようにした。屋根の鳥はフェニックスを象徴したつもりである。』



門衛所東面図
AN.4897-80（#1640-172）
（京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵）

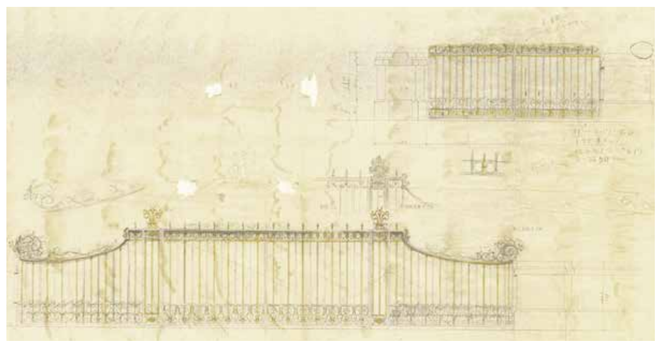


門衛所詳細図
AN4897-75（#1640-167）
（京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵）

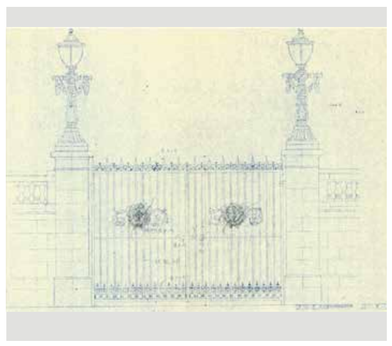
中門

『道の終わるところに中門を造ることにした。この中門は潜戸（くぐりど）を思わせる物で、グラン・トリアノン*の門からのヒントである。』

*グラン・トリアノン：ヴェルサイユ宮殿の離宮として、ルイ14世の命により建築された宮殿。



玄関庭中門門扉立面図
AN.4896-08（#1640007）
（京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵）

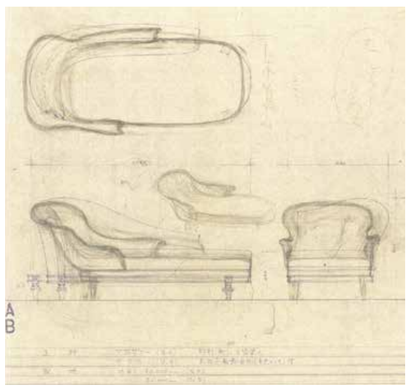


前庭両側門廻り詳細図
AN.4896-10（#1640-009）
（京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵）

寝椅子（カウチ）

『必要な形から大体において、寝椅子はアンピール風などが多いので大体そのように造ることにしたが、主賓用としては別の形の物を造った。幾度も造り直して曲線のある柔らかい形のものが出来た。』

完成写真：室内様式や他の家具との調和を保ちつつ、休息用としての機能を重視した意匠の寝椅子が製作されました。



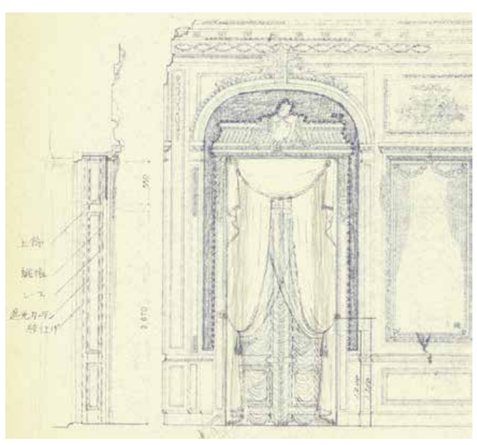
寝椅子（カウチ）
AN.4897-20（#1640-113）
（京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵）

窓掛

『今回の改装で研究を重ね、幾度も実際に模索して形を決めた。』

『この窓掛を取り換え、その意匠の一部を変更して、迎賓館らしく軽やかでかつ愉快で上品なものにすることについて関係方面の同意を得たので、出来る限り旧態を尊重しながらデザインを新しくすることで、室内の明るさを取り戻すことにした。』

完成写真



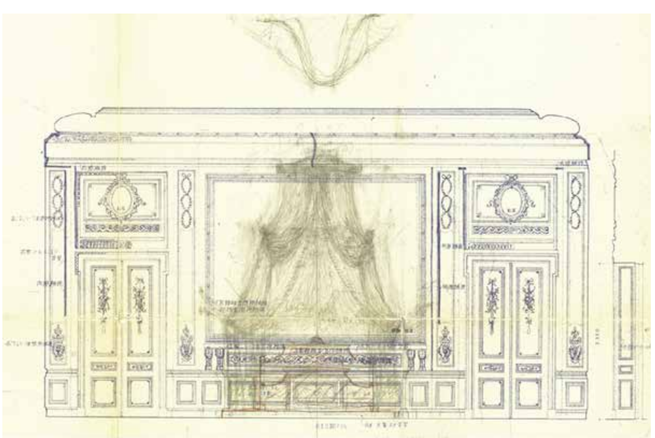
2階31号室　AN.4896-18（#1640-017）
（京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵）

寝室の天蓋（てんがい）

『天蓋（てんがい）の型やボリウムや、その素材、色彩については、数度も実際の形を模型によって練り直しながら、吊り方や、また、裂地（きれじ）の流線を寝台の大きさや置き方に合わせて造ったのである。』

『十二単や、神儀用からヒントを得て、出来るだけ刺激を避けて軟かい色彩のものを内側に二枚重ねて造ったので、このような手法は外国にはない。』

完成写真



2階30号室展開図　AN4896-17（1640-009）
（京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵）

昭和の改修 ― 赤坂迎賓館へ

正門門衛所の新築

正門近くに新たに設けられた小判形の門衛所。
子どもにも親しまれるように屋根には、フェニックスを象徴した金色の鳥の飾りがつけられました。

門衛ボックスの造り替え

幾度も模型を造り替え完成した門衛ボックス。
やさしい印象を持たせるため、細長い形状にしました。

創建時の門衛ボックス
絵葉書（大東京）赤坂離宮　個人蔵

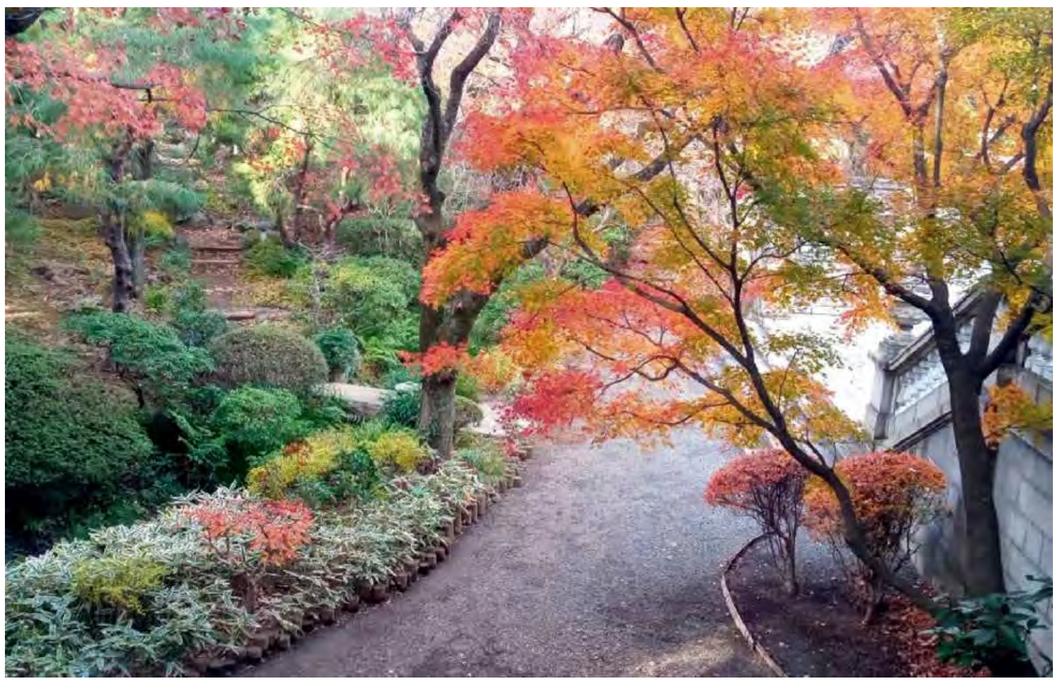
主庭の改修

噴水を力強い印象のものとするため、周囲の地盤面を上げることで水面を地面に近づけ、サツキで囲った外池を新たに設けて水量を増やしました。また、噴水の周りの松を増やし、本館から眺めた時に松の木を通して水を見せることで日本的な印象を与えることを村野藤吾（むらのとうご）は目指しました。噴水の南側には、外国のお客様の散策の際に日本ならではの憩いを感じてもらうために、せせらぎを造り、それに縫うような小路を添えました。

改修前

改修前　2階バルコニーより　絵葉書 庭園　個人蔵（長谷川怜氏 提供）

迫力が増すように既存の噴水のまわりに外池※を新設
※水があふれ出す淵からサツキの植栽までの部分



噴水の南側に設けられたせせらぎと小道

昭和の改修 ── 赤坂迎賓館へ

朝日の間　手織の緞通（だんつう）

改修前の朝日の間の床仕上げは寄木張りでしたが、外国の迎賓施設の例を参考に、国内で製作可能な敷物の最高級品と言える手織の緞通（だんつう）を寄木張りの上に敷きました。
47種類の紫色を基調とした糸を使い分け、色調の変化で桜の花とぼかし模様を織り出しています。

彩鸞（さいらん）の間　シャンデリアの吊り具

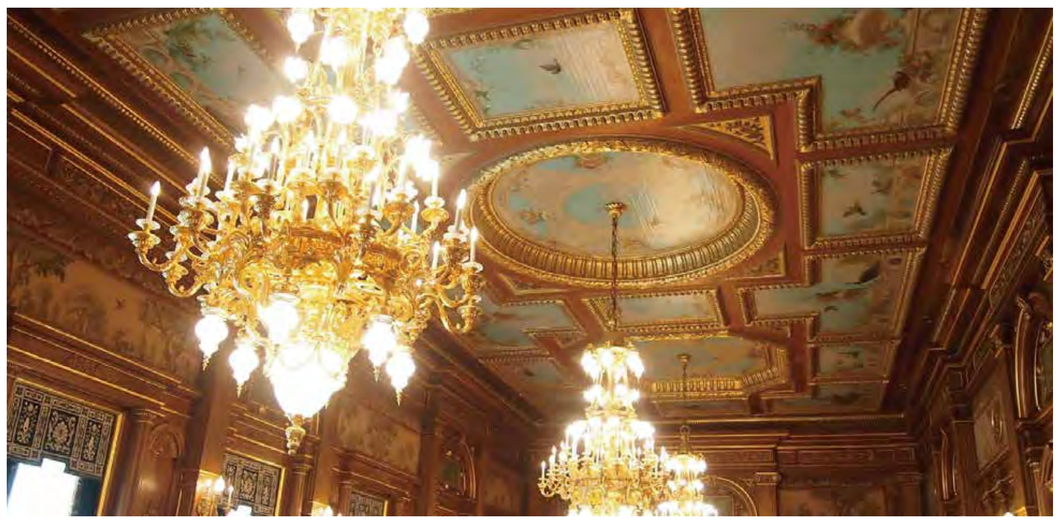
白と金箔のみの部屋に華やかさを添えるため、三灯のクリスタルガラスを主とするシャンデリアの吊り具の部分に赤、黄、緑の三色のリボンをつけました。
ヴェルサイユ宮殿のグラン・トリアノン宮殿の「饗宴（きょうえん）之間」を参考としたと言われています。

花鳥の間　大食器棚横の壁の織物

創建時はフランスにおいて製織された「ゴブラン織」の織物が張られていました。改修時には全体が黒ずみ、図柄の輪郭も不明確で補修による復元が不可能であったため、京都西陣の「綴錦織（つづれにしきおり）」で復元されました。
800色の糸を用い、製作日数3年1ヵ月、延べ約5,000人を要して仕上げられました。

花鳥の間　シャンデリアにスピーカー

館内で最も重く重厚な造りの花鳥の間のシャンデリア。内側に丸いスピーカー3つが組み込まれました。晩餐会などでスピーチが均等に聞こえるように工夫したものです。



１階北側ホール　モザイク床

数種の大理石片を模様張りしたモザイク床は、表面の風化、下地からの剥離が大部分で発生していたため補修し、一部は新規材により復元を行っています。創建時は全て外国産の大理石を使用していましたが、復元においては、イタリア、ギリシャ、ポルトガル、フランス、スウェーデン及び日本で産出された11種類の大理石を用いています。

エレベーターの設置

外国からのお客様、天皇皇后両陛下、内閣総理大臣などが使用されるエレベーターを正面玄関の左右の廊下に1基ずつ設置しました。雲母（うんも）の積層板に漆（うるし）で金箔を貼り表面を研磨し、和紙の美しさを表現しています。

エレベーター内の照明器具

迎賓館における外国要人の接遇

外国要人を日本に招へいする意義

諸外国の王族、国家元首や政府の要人を日本に招へいすることには次のような大きな意義があります。

・二国間関係の強化
・地域・国際社会の諸課題への取組
・要人間の個人的関係の構築
・日本に対する理解の増進・深化

このため外国要人を日本に招へいする際には、政府として要人の地位にふさわしい、敬意と礼節とをもって日本に迎えることが求められることから、政府の迎賓施設として建設されたのが迎賓館赤坂離宮です。

迎賓館は国賓、公賓及び公式実務訪問賓客の宿泊施設や各種会談等の場として使用されるほか、国際会議の会場としても使用されています。

外国要人の招へい区分

日本政府が外国要人を招へいする際には、各要人の地位や訪問の目的に応じて、招へいの在り方が定められており、迎賓館への宿泊等を行う要人は、主に次の3つと定められています。

① 国賓：国王、大統領又はこれに準ずる要人
② 公賓：皇太子、王族、首相、副大統領又はこれに準ずる要人
③ 公式実務訪問賓客：国賓及び公賓の対象者で実務を主たる目的とする要人が日本を訪問する場合

国賓、公賓及び公式実務訪問賓客として我が国を訪問する要人に対しては、政府として儀礼を尽くすという点に変わりはないものの、その地位や訪日目的に従って、訪日中の儀礼的行事（宮中行事、儀じょう隊の栄誉礼等）の実施の有無等で違いが設けられています。

これまで迎賓館においては、計３６６件の接遇を実施してきており、その内訳は、国賓が１０５件、公賓が７７件、公式実務訪問賓客が６５件、その他（国際会議ほか）が１１９件です。

令和6年3月末現在

【国賓】トランプ・アメリカ大統領
(2019(令和元)年5月)

【公賓】李克強・中国首相
(2018(平成30)年5月)

【公式実務訪問賓客】ミルジョーエフ・ウズベキスタン大統領
(2019(令和元)年12月)

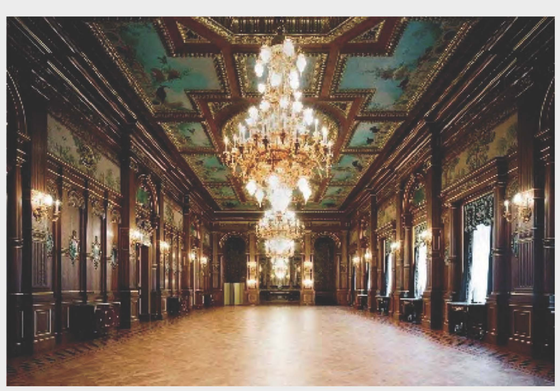
迎賓館内施設の主な用途

朝日の間

主に表敬訪問や外国要人会談などに使用。また、天皇皇后両陛下と国賓とのお別れの挨拶の場に使用。最も格式が高い部屋。

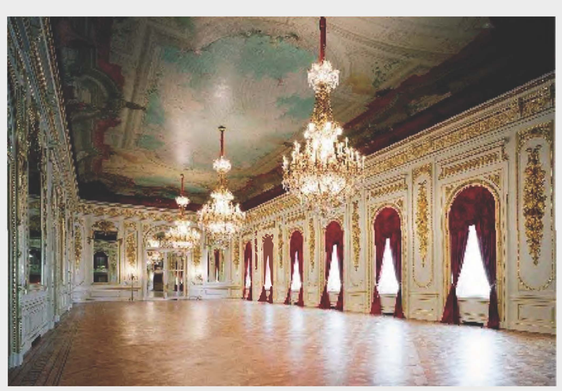
花鳥の間

主に国公賓主催の公式晩餐会や外国要人による共同記者会見会場等に使用。



羽衣の間

主に雨天の歓迎行事、レセプション、会議場等に使用。



彩鸞（さいらん）の間

主に表敬訪問客の控えの間に使用。国賓との謁見、調印式、プレスのインタビュー等にも使用。

迎賓館での主な接遇 ①

昭和、平成、令和の三代を通じて、世界各国から多くの王室関係者や首脳が迎賓館を訪問し、日本との間の二国間会談やＧ７首脳会議を始めとする国際会議に出席しています。

王室関係者

エリザベス２世・英国女王　（1975（昭和50）年５月）（内閣広報室提供）

チャールズ・英国皇太子　（1986（昭和61）年５月）（外務省外交史料館蔵）

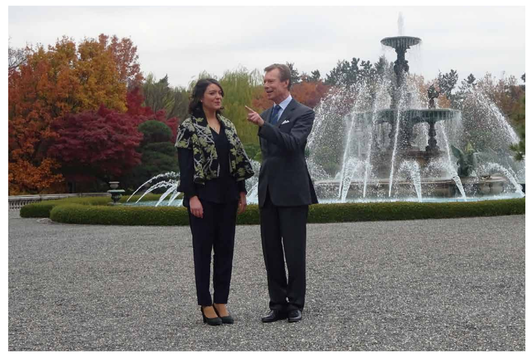
ハラルド５世・ノルウェー国王夫妻　（2001（平成13）年３月）

サイド・シラジュディン・マレーシア国王夫妻　（2005（平成17）年３月）

モハメッド６世・モロッコ国王　（2005（平成17）年11月）

ワンチュク・ブータン国王夫妻　（2011（平成23）年11月）

サルマン・サウジアラビア国王　（2017（平成29）年３月）



アンリ・ルクセンブルク大公　（2017（平成29）年11月）

国際会議等

日本・ASEAN特別首脳会議　（2003（平成15）年12月）

日中韓サミット　（2018（平成30）年５月）

東京オリンピック開会式関連　マクロン・フランス大統領
（2021（令和3）年７月）

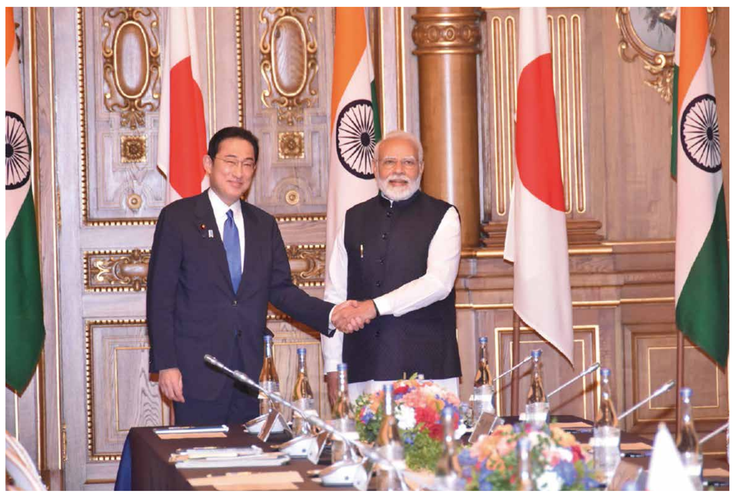
安倍元総理国葬儀関連　タミーム・カタール首長
（2022（令和4）年９月）

迎賓館での主な接遇 ②

各国首脳

アジア

テイン・セイン・ミャンマー大統領　（2012（平成24）年4月）



モディ・インド首相　（2022（令和4）年5月）

大洋州

パーマー・ニュージーランド首相　（1990（平成2）年7月）

アボット・オーストラリア首相　（2014（平成26）年4月）

北中米

フォード・アメリカ大統領　（1974（昭和49）年11月）

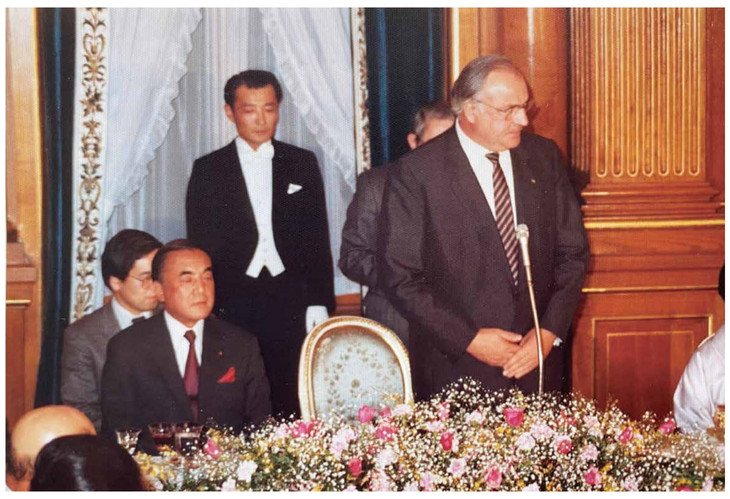
ケサーダ・メキシコ大統領夫妻　（2003（平成15）年10月）

南米

フジモリ・ペルー大統領　（1992（平成4）年3月）

カルドーゾ・ブラジル大統領夫妻　（1996（平成8）年3月）

欧州



コール・ドイツ首相　（1983（昭和58）年10月）

ゴルバチョフ・ソ連大統領夫妻（1991（平成3）年4月）（外務省外交史料館蔵）

中東・アフリカ

ザーイド・アラブ首長国連邦大統領（1990（平成2）年5月）（内閣広報室提供）

マンデラ・南アフリカ大統領　（1995（平成7）年7月）

迎賓館での日本紹介行事

各国要人を日本にお迎えする際には、直接、日本の姿を見て頂くとともに、日本国民との触れ合いを通じて、日本の文化や伝統、国民性を理解頂くことも大変に重要です。かかる観点から、迎賓館において、様々な日本紹介行事が行われています。

日本文化鑑賞／体験

盆栽鑑賞　G7各国要人　（1993（平成5）年7月）

茶道体験　カルトーゾ・ブラジル大統領夫人
（1996（平成8）年3月）

狂言鑑賞　クリントン・アメリカ大統領　（1996（平成8）年4月）

着物鑑賞　朱・中国首相夫人　（2000（平成12）年10月）

生け花鑑賞　ナポリターノ・イタリア大統領夫人
（2009（平成21）年9月）

琴鑑賞　クアン・ベトナム国家主席夫人
（2018（平成30）年5月）

和食のおもてなし

クリントン・アメリカ大統領　（1996（平成8）年4月）

アブドッラー2世・ヨルダン国王　（2016（平成28）年10月）

楊・中国共産党中央政治局委員　（2020(令和2）年2月）

武道演舞等

弓道体験　ポルティーリョ・メキシコ大統領
（1978(昭和53)年10月）　（外務省外交史料館蔵）

空手演舞　ファン・カルロス1世・スペイン国王
（1980（昭和55）年10月）　（外務省外交史料館蔵）

和太鼓演奏　国際女性会議WAW！2022
（2022（令和4）年12月）

迎賓館で接遇した国賓一覧

1974（昭和49）年～1992（平成4）年

1974（昭和49）年 11月	アメリカ合衆国	ジェラルド・R・フォード大統領
1975（昭和50）年 4月	ルーマニア社会主義共和国	ニコラエ・チャウシェスク大統領夫妻
1975（昭和50）年 5月	英国（グレートブリテン及び北アイルランド連合王国）	エリザベス２世女王・エディンバラ公フィリップ殿下
1976（昭和51）年 3月	ヨルダン・ハシェミット王国	フセイン一世国王王妃両陛下
1976（昭和51）年 9月	ブラジル連邦共和国	エルネスト・ガイゼル大統領夫妻
1977（昭和52）年 4月	フィリピン共和国	フェルディナンド・E・マルコス大統領夫妻
1978（昭和53）年 3月	ブルガリア人民共和国	トドル・ジフコフ国家評議会議長
1978（昭和53）年 4月	バングラデシュ人民共和国	ゼアウル・ラーマン大統領夫妻
1978（昭和53）年 4月	ドイツ連邦共和国	ヴァルター・シェール大統領夫妻
1978（昭和53）年 5月	ネパール王国	ビレンドラ国王王妃両陛下
1978（昭和53）年 10月	メキシコ合衆国	ロペス・ポルティーリョ大統領夫妻
1979（昭和54）年 4月	セネガル共和国	レオポール・セダル・サンゴール大統領夫妻
1979（昭和54）年 6月	アメリカ合衆国	ジミー・カーター大統領夫妻
1979（昭和54）年 9月	スリランカ民主社会主義共和国	ジューニアス・リチャード・ジャヤワルダナ大統領夫妻
1979（昭和54）年 10月	アルゼンチン共和国	ホルヘ・ラファエル・ヴィデラ大統領夫妻
1980（昭和55）年 3月	パナマ共和国	アリスティデス・ロヨ大統領夫妻
1980（昭和55）年 4月	スウェーデン王国	カール16世グスタフ国王王妃両陛下
1980（昭和55）年 5月	中華人民共和国	華国鋒国務院総理（党主席及び党軍事委員会主席兼任）
1980（昭和55）年 9月	ザンビア共和国	カウンダ大統領夫妻
1980（昭和55）年 10月	スペイン王国	ファン・カルロス1世国王王妃両陛下
1981（昭和56）年 3月	タンザニア連合共和国	ニエレレ大統領夫妻
1981（昭和56）年 4月	デンマーク王国	女王マルグレーテ2世陛下・ヘンリック皇配殿下
1981（昭和56）年 5月	ドイツ民主共和国	エーリヒ・ホネカー国家評議会議長
1982（昭和57）年 3月	イタリア共和国	サンドロ・ペルティーニ大統領
1982（昭和57）年 4月	ケニア共和国	ダニエル・トロイティッチ・アラプ・モイ大統領
1982（昭和57）年 4月	フランス共和国	フランソワ・ミッテラン大統領夫妻
1983（昭和58）年 4月	エジプト・アラブ共和国	モハメッド・ホスニィ・ムバラク大統領夫妻
1983（昭和58）年 7月	パキスタン・イスラム共和国	モハマッド・ジアウル・ハック大統領夫妻
1983（昭和58）年 9月	アイルランド	パトリック・J・ヒラリー大統領夫妻
1983（昭和58）年 10月	ノルウェー王国	オーラフ5世国王陛下
1983（昭和58）年 11月	アメリカ合衆国	ロナルド・レーガン大統領夫妻
1984（昭和59）年 4月	ブルネイ・ダルサラーム国	ハナサル・ボルキア・ムイザディン・ワダウラー国王王妃両陛下
1984（昭和59）年 4月	カタール国	シェイク・ハリーファ・ビン・ハマド・アール・サーニィ首長殿下
1984（昭和59）年 5月	ブラジル連邦共和国	ヨアン・バチスタ・デ・オリヴェラ・フィゲイレード大統領夫妻
1984（昭和59）年 7月	ビルマ連邦社会主義共和国	サン・ユ大統領夫妻
1984（昭和59）年 9月	大韓民国	全斗煥大統領夫妻
1984（昭和59）年 9月	ガボン共和国	エル・アジ・オマール・ボンゴ大統領夫妻
1985（昭和60）年 6月	バングラデシュ人民共和国	フセイン・モハマッド・エルシャド大統領夫妻
1986（昭和61）年 7月	アルゼンチン共和国	ラウル・リカルド・アルフォンシン大統領
1986（昭和61）年 9月	ニジェール共和国	セイニ・クンチェ最高軍事評議会議長
1986（昭和61）年 9月	フィンランド共和国	マウノ・ヘンリック・コイヴィスト大統領夫妻
1986（昭和61）年 11月	フィリピン共和国	コラソン・コファンコ・アキノ大統領
1986（昭和61）年 11月	メキシコ合衆国	ミゲル・デラマドリ・ウルタード大統領夫妻
1987（昭和62）年 6月	ポーランド共和国	ヴォイチェフ・ヤルゼルスキ国家評議会議長夫妻
1988（昭和63）年 4月	ベネズエラ共和国	ハイメ・ルシンチ大統領
1988（昭和63）年 6月	セネガル共和国	アブドゥ・ディウフ大統領夫妻
1989（平成元）年 10月	ジンバブエ共和国	ロバート・ガブリエル・ムガベ大統領夫妻
1989（平成元）年 12月	タンザニア連合共和国	アリ・ハッサン・ムウィニ大統領夫妻
1990（平成2）年 5月	アラブ首長国連邦	シェイク・ザーイド・ビン・スルタン・アール・ナハヤーン大統領
1990（平成2）年 5月	大韓民国	盧泰愚大統領夫妻
1991（平成3）年 4月	ソビエト社会主義共和国連邦	ミハイル・セルゲイヴィチ・ゴルバチョフ大統領夫妻
1991（平成3）年 10月	オランダ王国	ベアトリックス・ウィルヘルミナ・アルムハルト女王
1992（平成4）年 1月	アメリカ合衆国	ジョージ・ブッシュ大統領夫妻

1992（平成4）年～ 2019（令和元）年

1992（平成4）年 3月	ペルー共和国	アルベルト・フジモリ・フジモリ大統領夫妻
1992（平成4）年 4月	チェコ・スロバキア連邦共和国	ヴァーツラフ・ハヴェル大統領夫妻
1993（平成5）年 3月	フィリピン共和国	フィデル・ラモス大統領夫妻
1993（平成5）年 4月	マレーシア	アズラン・シャー国王王妃両陛下
1993（平成5）年 10月	ロシア連邦	ボリス・ニコラエヴィチ・エリツィン大統領夫妻
1993（平成5）年 10月	ポルトガル共和国	マリオ・アルベルト・ノブレ・ソアレス大統領夫妻
1994（平成6）年 3月	大韓民国	金泳三大統領夫妻
1994（平成6）年 12月	ポーランド共和国	レフ・ワレサ大統領夫妻
1995（平成7）年 2月	アイルランド	メアリー・ロビンソン大統領夫妻
1995（平成7）年 3月	エジプト・アラブ共和国	モハメッド・ホスニ・ムバラク大統領夫妻
1995（平成7）年 7月	南アフリカ共和国	ネルソン・ロリシュラシュラ・マンデラ大統領
1996（平成8）年 3月	ブラジル連邦共和国	フェルナンド・エンリケ・カルドーゾ大統領夫妻
1996（平成8）年 4月	アメリカ合衆国	ウィリアム・ジェファソン・クリントン大統領夫妻
1996（平成8）年 7月	チュニジア共和国	ズィン・エル・アビディン・ベン・アリ大統領夫妻
1996（平成8）年 10月	ベルギー王国	アルベール・フェリックス・アンベール・テオドール・クリスティアン・ユジュンヌ・マリー2世国王王妃両陛下
1996（平成8）年 11月	フランス共和国	ジャック・シラク大統領夫妻
1997（平成9）年 3月	メキシコ合衆国	エルネスト・セディージョ・ポンセ・デ・レオン大統領夫妻
1997（平成9）年 4月	ドイツ連邦共和国	ローマン・ヘルツォーク大統領
1997（平成9）年 11月	ブルガリア共和国	ペータル・ストヤノフ大統領夫妻
1998（平成10）年 4月	イタリア共和国	オスカル・ルイジ・スカルファロ大統領
1998（平成10）年 10月	大韓民国	金大中大統領夫妻
1998（平成10）年 11月	中華人民共和国	江沢民国家主席夫妻
1998（平成10）年 12月	アルゼンチン共和国	カルロス・サウル・メネム大統領
1999（平成11）年 4月	ルクセンブルク大公国	ジャン大公同妃両殿下
1999（平成11）年 6月	オーストリア共和国	トーマス・クレスティル大統領夫妻
1999（平成11）年 11月	ヨルダン・ハシェミット王国	アブドッラー・ビン・アル・フセイン国王王妃両陛下
2000（平成12）年 4月	ハンガリー共和国	ゲンツ・アールパード大統領夫妻
2001（平成13）年 3月	ノルウェー王国	ハラルド5世国王王妃両陛下
2001（平成13）年 10月	南アフリカ共和国	タボ・ムヴイェルワ・ムベキ大統領夫妻
2002（平成14）年 12月	フィリピン共和国	グロリア・マカパガル・アロヨ大統領及び夫君
2003（平成15）年 6月	大韓民国	盧武鉉大統領夫妻
2003（平成15）年 6月	インドネシア共和国	メガワティ・スカルノプトゥリ大統領及び夫君
2003（平成15）年 10月	メキシコ合衆国	ビセンテ・フォックス・ケサーダ大統領夫妻
2004（平成16）年 11月	デンマーク王国	マルグレーテ2世女王陛下及び王配殿下
2005（平成17）年 3月	マレーシア	サイド・シラジュディン第12代国王王妃両陛下
2005（平成17）年 11月	モロッコ王国	モハメッド6世陛下
2009（平成21）年 5月	シンガポール共和国	Ｓ Ｒ ナザン大統領夫妻
2010（平成22）年 5月	カンボジア王国	シハモニ国王陛下
2011（平成23）年 11月	ブータン王国	ジグミ・ケサル・ナムギャル・ワンチュク国王王妃両陛下
2012（平成24）年 3月	クウェート国	シェイク・サバーハ・アル・アハマド・アル・ジャービル・アル・サバーハ首長
2012（平成24）年 10月	マレーシア	アブドゥル・ハリム・ムアザム・シャー第14代国王王妃両陛下
2013（平成25）年 6月	フランス共和国	オランド大統領及びトリエルヴェレール女史
2014（平成26）年 3月	ベトナム社会主義共和国	チュオン・タン・サン国家主席夫妻
2014（平成26）年 4月	アメリカ合衆国	バラク・オバマ大統領
2014（平成26）年 10月	オランダ王国	ウィレム・アレキサンダー国王王妃両陛下
2015（平成27）年 6月	フィリピン共和国	ベニグノ・アキノ３世大統領
2016（平成28）年 10月	ベルギー王国	フィリップ陛下国王王妃両陛下
2016（平成28）年 11月	シンガポール共和国	トニー・タン・ケン・ヤム大統領夫妻
2017（平成29）年 4月	スペイン王国	フェリペ6世国王王妃両陛下
2017（平成29）年 11月	ルクセンブルク大公国	アンリ大公殿下
2018（平成30）年 5月	ベトナム社会主義共和国	チャン・ダイ・クアン国家主席夫妻
2019（令和元）年 5月	アメリカ合衆国	ドナルド・ジョン・トランプ大統領夫妻

（令和５年３月末現在）